

短編小説の学習指導

——「小さき者へ」のばあい——

一 教材「小さき者へ」の性格

(1) 教科書中での位置

五月。教室に新しい期待と不安が漂っていた。「春動く」と題する単元一で、蛙の声にそよぐ若葉を味わった後、第二単元「希望」へと進んできた。新しい生活への自ずからなる期待、いまだ方向を見いださずにとまっているよき生への意志、未知なる深い愛への憧れ、——これらにふれる最初の教材として、私たちは、「小さき者へ」にむかった。

学習者——一年普通科二クラス（男女混合55人）

一年家庭科二クラス（女子のみ55人）

(2) 教材の内容

——長さ——教科書十三ページにわたるこの教材は、ほとんど原作のまま採録しており、まとめて省略されているのは、はじめの方で、長男誕生の場面と、末尾に近く、U氏のことを叙した場面である。

杉 原 康 子

——形式——父親が、幼くして母を失った三人の子供たちにあてて書いた、手紙の形をしている。

——中心の内容——

◇ 母上の崇高な愛、父親の深い愛を描くことにより、子供たちに対して、人生の可能性を味覚させ、生き方への示唆を与えようとしている。

◇ 母上の死という不幸を、子供たちにまっすぐ見つめさせて、その悲しみが、人生を深く生きるための強みであることを力説し、遠い、暗い人の世の旅へのぼる勇気を、小さき者たちに与えようとしている。

二 学習指導計画

(1) 学習プリントの用意

くり返し読んでいるうちに、段落ごとに質問を設定して、答を要求していく方法を思いついたので、次のようなプリントを用意した。

「小さき者へ」

有島武郎 37・5・春深き日

—— 学習プリント ——

一年(組)番(氏名) ()

次の間に答えながら、本文を読み深める。

①私は、おまえたちに、なぜこの書き物を書こうとしているのか。

②母上は、なぜ入院せねばならぬからだとなってしまうたのか。

③母上の病気によって、私はどんな苦しみを味わわねばならなかったか。

④「早く退院したい」という母上の気持ちは、どういう思いによって、一番強く動かされているか。

⑤私は、どうして涙がこぼれたのだろう。

⑥私たちは、どこからどこへのがれていったか。それはなぜだったのか。

⑦新しい土地での生活で、まずどんな明るさがあったか。次にどんな暗さが迫ってきたか。この時私の仕事はどうなったか。

明るさ——

暗さ 〓

私の仕事 〓

⑧ 凄惨な感じの母上の顔には、どういふ思いが刻まれていたか。

⑩ 私たちはそれぞれ、なんのために戦ったのか。

母上 〓

私 〓

おまえたち 〓

⑫ 「死がすべてを圧倒した。そして死がすべてを救った。」という
ことなのだろうか。この部分に関係のある部分を後の文章の中
から選べ。

⑨ 母上の熱い涙は、おまえたちにとって、どんな価値をもっている
か。

⑬ 母上は、なぜ死ぬ時にも子供たちには会わなかったのか。

⑭ 母上との別れの場面で、読者の心に一番痛ましく写るのは、どう
いう情景か。

⑮ 母上の、なにが私を救ったのか。

⑮「私はそのとき、ぎょっとして無垢の世界を眼前に見る。」この文を解釈せよ。

⑯この節の中で一番大切だと思われることば(六字)を赤でかこめ。

⑰作者は、この悲しみをどんなふうにとり受けているか。

⑱この部分で心に迫る表現はないか。私はおまえたちにどういよよびかけをしているか。

⑲母上の少女じみた野心とはどういうことか。写真をとられる時の母上の描写をぬきだせ。この場面から、母上のどんな性格がうかがえるか。

⑳ここには、私の、(子供たちに対する、人生に対する) どういう覚悟が示されているか。

㉑

㉒くり返し使われていることばを発見せよ。

②「小さき者へ」を読んで。

- (2) 学習プリントのねらい
- イ 学習者の学習意欲を喚起する。
 - ロ 段落ごとの中心を把握する。
 - ハ 問に対する答は、まず個人作業とし、ひとりて考え、味わう時間を与えたい。
 - ニ ノートで学習するより、読み終わった時の充実感が、深くはないだろうか。
- 以上総じて、教材をしっかりと読んでほしい。それぞれが教材の深みにふれて、感動を受けてほしいためであった。

三 学習指導の過程

一時間め ◇単元導入、第二単元「希望」

「待て、そして希望せよ。」——アレクサンドル・ジュマのことは味わう。そしての働き。

あわせて、「希望は飢えた人のパンである。」

「絶望は死にいたる病である。」

「心に太陽を、くちびるに歌を。」

を味わう。↓「希望をもつこと」の意味、尊さを理解。

◇学習プリント(その1)の配布

プリントの記入状態	指導上の留意点
<p>①私は、おまえたちに、なぜ、この書き物を書こうとしているか。</p> <p>——20ページ行め〜21ページ行め——</p>	<p>なぜ(理由)↓だからに着目。</p> <p>パパ(大正初期に、こう呼ばせている家庭の雰囲気。)</p>

おまえたちを、どんなに深く愛した者がいる（た）かという事実。永久に必要なもの。

← おまえたちを暖め、慰め、励まし、

人生の可能性を味覚させずにはおかないから。（希望をもつことができる。）

②母上は、なぜ入院せねばならぬからだとなつてしまったのか。

← 21ページあとから五行め、22ページあとから三行め、結核になつてしまったから。

← おまえたちに愛情の限りを尽して。（無理だった。）

← 私の無理解、わがまま。四つ、三つ、二つの子供たち。

← 十月末の寂しい秋の日——入院

③母上の病氣によって、私はどんな苦しみ^を味わねばならなかつたか。

← 22ページ最後の三行、23ページ最後から七行め——

①宝をだきかゝえるように、おまえたちを胸に集めようとする。

（こんなにいたい）

母上に、おまえたちを近づけないようにしなければならなかつた。

②神経の過敏な、ねつかないおまえたち、

乳を求めて泣くおまえたち、

他人になつかないおまえたち。

③疲れた頭で仕事をしなければならなかつた。

④「早く退院したい」という母上の気持ちは、どういふ思いによつて、一番強く動かされているか。

生命にいちばん大切な養分——母上の愛情。

← 事実^は事実だ。この認識の厳しさ。回復の道なく不幸だ。

不幸なものたちよ。（一回め）

← 教科書だけでは説明不足なところを注として、プリントの余白に記入させた。

（注1）——「いろいろ／＼な問題をあり余るほど持っていた。」

（注2）——「何事もひとりでかみしめてみる私の性質。」

← 没義道に取り扱う。

← 執念く泣く。結核の徴候。医師の鑑定。

← 当時における結核の恐ろしさ。

克明な門徒のぼあさん
神経の過敏
言葉

「宝をだきかかえるように」
「堅い心のようなものできた頭」
表現

（注3）——仕事をするところ。

北国
かえで
ほろびゆくもの。

菊（時は秋だのに）
心細さ・不安

→ 23 ページ十一行 → 24 ページ一行

窓の下のかえで → 一枚も残らず。

花壇の菊 ↓ 霜にいためられて、しおれている。

心細い。「しかし」

ほんとうの気持ち → おまえたちから一刻も離れてはいられなくな

なった。

⑤ 私はどうして涙がこぼれたのだろうか。

→ 24 ページ二行 → 24 ページ六行 →

あられの降る寒い日、お母さんのまわりに、もう子供たちが集つてうれしそう。

(こんな日でも退院した。たまらなかつた。) ↓ 涙がこぼれた。

○ 親子の情愛の美しさ、いとしさ、(そして、申しわけなさ。)

⑥ 私たちは、どこからどこへのがれていったか。それはなぜだったのか。

札幌(北) ↓ 東京(南)

○ 北国の寒さと母上の病気のため。

晩秋 → 初雪の降りしきる夜

♪ 雑草の株のように

かたまっている。よりそっている。

⑦ 新しい土地での生活で、まずどんな明るさがあったか、次にどんな暗さが迫ってきたか。この時、私の仕事はどうなったか。

→ 25 ページ三行 → 25 ページ後から二行 →

明るさ → (1) たくさんの親類や兄弟がいて、深い同情をよせてくれた。

しかしの働き。

× そんなところ

◎ おまえたちとのつながり。

大人(特に男の人)が涙をこぼす時。

「私はそれを見ると涙がこぼれた。」

感情表現なし ↓ 余情。

(解釈の深まり)

♪ 雑草の株のように

津軽海峡。

がんぜない。——(一回め)

親類

兄弟(里見淳・有島生馬)

K 海岸

暗さ 〓 (2) 母上の病気がちょっとよくなった。(小康)
(1) 母上の病状が悪化、

(2) おまえたちの中のひとりが高熱
(3) 私もついに倒れた。

私の仕事 〓 私から千里も遠くに(遠く遠く) 離れてしまった。

・それでも 〓 もう悔もうとはしなかった。

(それほどまでに、母上やおまえたちを愛している。)

〓 おまえたちのために最後まで戦おうとする熱意が、
病熱よりも高く、私の胸の中で燃えているのみ。

〔その1〕

⑧ 凄惨な感じの母上の顔には、どういう思いが刻まれていたか。
— 25ページ後から一行— 26ページ五行—

死に対するあきらめ

矛盾

おまえたちに対する根強い執着

生きたい。

まっさおな
すがすがしい顔

「冷たい覚悟を微笑に言わして」

⑨ 母上の熱い涙は、おまえたちにとって、どんな価値をもっているか。

— 26ページ六行— 26ページ十四行—

さめざめ 〓 あふれる涙 〓 熱い涙

気性の強い母上が、

おまえたちだけの尊い所有物

母上はおまえたちだけのために泣いてくれた。

小康 貸↑↓借

〓 かれ(運命)はどんなことがあっても、し遂ぐべき
ことをし遂げずにはおかない。

かりそめのかぜ。

↑愛の深まり
戦い。

プリント「その2」配布。「その1」の段落は、指名
読みを区切って、

冷たい覚悟

おまえたちに対する根強い執着

凄惨な感じ

H海岸

◎おまえたちのための悲しい決意の涙

三人の子に対する限りない愛の涙

覚悟のほそ

流れ落ちた涙のゆくえは知らない。

ともかく、おまえたちだけの

尊い所有物だ。

悲しみ・いとしさ（かけがえのない愛）

⑩母上との別れの場面で、読者の心に一番痛ましくうつるのは、どういう情景か。

— 26ページ十五行— 27ページ五行—

がんぜない驚きの目↓大きな自動車にばかり。
兵隊のように拳手の礼をした。

寂しく見やうっている母上。

⑪私たちはそれぞれ、なんのために戦ったのか。

— 27ページ六行— 27ページ後から六行—

母上— (1)死に対して最上の態度をとるために。

(2)おまえたちに最大の愛を残すために。

(3)私をかげんなしに理解するために。

私— (1)母上を病魔から救うために。

(2)自分に迫る運命を勇らしく肩にないあげるために。

おまえたち— (1)ふしぎな運命から自分を解放するために。

(2)身にふさわがない境遇の中に自分をはめこむために。

血まぶれの戦い— 苦しみのひびき

⑫「死がすべてを圧倒した。そして死がすべてを救った。」どうい

うことなのだろうか。この部分に関係のある部分を後の文章の中
から選ぶ。

— 27ページ後五行— 後四行—

死がすべてを圧倒した。↓⑬

(何もかも) (おし倒した。)

がんぜない— (二回目)

不幸なものたちよ。— (二回目)

熱病の予後

いたいけな、無心さはひどく痛ましい。

入院— 一年七箇月

○死に対する最上の態度

(例えば幸田露伴の死)

○私をかげんなしに理解する。

(理解—愛)

それぞれのがんばり。

覚悟。

大正五年(一九一六年)八月二日 作者三十九才

⑬ 母上は、なげ死ぬ時にも子供たちには会わなかったのか。

↓ 27 ページ十四行 ↓ 28 ページ十二行 ↓

(1) 病菌をおまえたちに伝えないために。

(2) 自分の心の破れるのを恐れた。

(3) 幼い心に残酷な死の姿をみせて、おまえたちの一生を暗くさせたくないため。

◎ 血の涙を泣きながら。

・子を思ふ親の心は日の光

世より世を照る大きさに似て、

(愛情の広さ・深さ)

⑭ 母上の、なげ私を救ったのか。

↓ 28 ページ十三行 ↓ 29 ページ九行 ↓

母上の死 (犠牲になった。↑愛しているから。)

↑ 自分をありのままに認めてくれた。 ↓

生きてゆくべき大道にさまよい出た。

自分の弱さに力を感じ始めた。

鋭敏に自分の魯鈍を見抜き、

大胆に自分の小心を認め、

労役して自分の無能力を体験した。

ありのままの自分を素直に。自分自身なりに徹底して生きてみよう。

⑮ 「私はその時、ぎよっとして、無却の世界を眼前に見る。」この

文を解釈せよ。

↓ 29 ページ七行 ↓ 29 ページ最後 ↓

その時 ── 「ママちゃん、ごきげんよう。」と快活に叫ぶ瞬間。

ぎよっとして ── 恐ろしさ、ぐざとえぐり通す。

残酷な死の姿 ↓ 与える印象

(体験想起)

この母上の配慮、思いやりの深さ。

(きつと価値高く見るときが来るだろう。)

魯鈍 成就 労役

この力

(自分を自分なりに、自分は自分なりに、生きようと決心した時わいてくる力。)

母上 → ありのままの自分を成就させてくれた。

(ここまで、愛されて初めてわいてきた力。)

がんぜない ── 三回め、

不幸なものたちよ ── 三回目。いわれもない悲しみ ↓

〔その2〕

無却の世界——永遠の世界、深い深い世界。

♪愛のつながり（無限の世界と有限の世界が通じるよう）のはるけさ（瞬間、思い）。

⑥この節の中で一番大切だと思われることは（六字）を赤でかこめ。
—30ページ最初—30ページ七行—

〔人生の寂しさ（母上の死）〕

小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。」「それは心一つだ。」

⑦作者はこの悲しみをどんなふうにと受けてっているか。

—30ページ八行—30ページ十二行—

見るに痛ましい人生の芽ばえ。

（しかし）この悲しみ↓強み。

なぜか。（この損失によって、私たちは人生に深入りした。）

人生を生きる以上、人生に深入りしないものは災である。

⑧この部分で心に迫る表現はないか。私はおまえたちにどういよう

びかけをしているか。

—30ページ四行—31ページ後から七行—

○表現—

血を味わった獣のように愛を味わった。

（一度味わったら忘れられない。）それほどむさぼるように

愛を味わった。深く、切なく、耐えがたく

←それほどまでに痛烈な思慕。（失ったので、いつそう深く愛のありがたさを暴う。）

寂しさ、

◎無却の世界（無限の深さ）はるけき思い。

述懐・閑散

◎私たちはそのありがちのことからの中からも、人生の寂しさに深くぶつかってみることができる。それは心一つ。

悲しみが強みである。

（愛の尊さを思い知らされた。）

○人生に深入りするということ。

（くり返すことのできない

人生を深く生きる↑この悲しみによって）（力をこめて）

十分人の世は寂しい。

血を味わった獣のように

寂しさから救うために。

×親としての報酬

六時間め

○よびかけ
行こう

できるだけ周囲を寂しさから救うために働こう。
(できるだけ愛を深めていこう。)

母上の少女じみた野心とはどういうことか。写真をとられる時の母上の描写をぬきだせ。この場面から、母上のどんな性格がうかがえるか。

— 31 ページ後から七行 — 32 ページ六行 —

○野心

へやの中にいい肖像を飾っていた。(ギリシヤの母のまね)

ミネルバ — 女神、知恵深く。
クロムウェル — 政治家、男らしく。
ゲーテ — 大詩人、心豊かに。
ナイチンゲール — 看護婦、やさしく。

この人々にあやかっ
てよい子を。

愛情深く、細やか。
慎重な、心の豊かな人。(性格)

○描写

思う存分化粧して、

一番の晴れ着を着て、

「産は女の出陣だ。いい子を生むか死ぬか。」(死にぎわの装い。)

真剣そのもの、本気で生きている。(性格)

②③ ここには、私の(子供たちに対する、人生に対する)どうい
う覚悟が示されているか。

— 32 ページ七行 — 32 ページ後から三行 —

私の足跡に不純な何物も見いだしえないだけのこととする。きつ

(無償の愛)

倒れた親を食い尽して力を蓄えるししの子のように、
力強く勇ましく私を振り捨てて人生にのりだしてい
け。

少女じみた野心

(偉い人の肖像にあやかり、りっぱな子を生もうと
いうのぞみ。)

私は軽い皮肉の心で見っていた。

心なく笑ってしまった。

(母上の思いつめたことば — その愛の深さを知ること
のできなかった私は、愚かにも、笑ってかたづ
けしてしまった。)

しかし

今はそれも笑ってはいられない。

深夜の沈黙は私を敵菌にする。私は私の役目をなし

とする。

(必ず、純粹なものを見いだすだろう。)

純粹に生きる覚悟。―人生の方向、

②この三行について、気のつくことはないか。

―32ページ後から二行―最後まで。―

(1)小さき者よ。―小さき者よ。で終っている。

(2)人の世の旅にのぼれ。

恐れてはならぬ。

命令形禁止 } よびかけ

(3)文が短く切れている。(力強くなっている。リズムがでてくる。)

文の呼吸が早い。(作者がはげしく息づいている。)

私の願い↓訴えている。

行け(ノ)勇んで、小さき者よ。

(人の世の旅にのりだしてゆけノ)

・おまえたちの新しい門出ノ

(作者もまた、出発だった。―注4)

③全文中に、くり返し使われていることばを発見せよ。

①がんぜない(おまえたち)―三回

―おまえたちがどんなに小さいか、いたいけな姿であるか。愛しくてたまらない。いじらしくてたまらない。

②不幸なものたちよ。

―小さなお前たちを、はっきり不幸だといっている。不幸にまっすぐぶちあたらせている。

不幸(母上の愛を失った。)->人生の寂しさ。

③小さき者よ、

遂げること全力を尽す。

純粹な生き方。(問題提起)

「小さき者よ、不幸なそして同時に幸福な、おまえたちの父と母との祝福を胸に留めて人の世の旅にのぼれ。前途は遠い。そして暗い。しかし、恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。」(このよびかけにこめられている作者の深い思いを。)

作者もまた出発だった。(注4)

(U氏の話―生き方への示唆)

くり返し使われることば。(作者の感動がこめられている。)

がんぜない

(幼い、ききわけがない。ものの判断がつかない。)

なぜ「母上」と呼んでいるか。このよびかたにこめられた作者の思い。

しただけど、今はまだお前たちは小さい。

「どうかもっと大きく賢くなって、寂しさを救うために戦ってほしい。」

この願いをこめて、愛情いっぱい、「小さき者よ。」とよびかけている。

◎「小さき者へ」を読んで。

—おもな要旨まとめ—

○母上の愛情の深さに心打たれた

○残された父親の、いつまでもくじけない意志の強さ、強い愛に感動。

○私たちにとっての愛のだいじさ、ありがたさ。

○母の愛を失った時の寂しさ、共感多し。この寂しさ、この悲しさの上に、強く、深く生きたい。慰められた。

○自分の父、母と比較して、こんなにりっぱでないけど、自分にはかけがえがない、両親の存在のありがたみを感じた。

四 そこに見いだされた問題

A 学習プリント制作の意図は実現されたか。

(1) ノートで学習するよりは、おもしろいとする生徒が多く、読みを完結した感じをもったようであった。

(2) 段落ごとの質問は、読みにはりあいをもちたせたらしく、かなり意欲的であった。

(3) 段落は、こちらから範囲を指定したが、(プリントその2)は、生徒に範囲を区切らせた。時間はかかるが内容把握には役立

つように思う。

(4) はじめは個人作業で、それを発表させながら一問ずつ板書して、解答をまとめていったのだが、そのまとめだけをうつしてやるむきの生徒もあった。

B この方法について考えること

(1) 短編小説の場合、きめを細かく読んでいくために、設問によって、読みの指針を与えることはむだではない。ただこの場合、作

自分の感想をもつ。
(一組だけ、感想発表会)

品にじかにふれて感じる、なまの感動は殺されないだろうか。
(2) 初めから分析的な読みが行なわれたわけで、内容はよくわかったとする学習者が多かった。ただ、この読みの結果、でてきた感想は、印象深い部分の、本文を引用し、それによりかかったものが多かった。

(3) 答を記入していく時、クラスによって、かなりむらがあった。順序は、一組、三組、二組、四組の順であったが、一組より四組の方が、原文をそのまま引用した解答が多い。理解の初めの段階として、簡単に、答を本文から自分のことばにしてしまふのは、危険で、読みを浅くする。できるだけ本文にひつついて、本文の中にひたって、できるだけ本文の表現を生かしていくこの考えは、初めからあったのだけれども、指導者に余裕がないため、初めは安易に流れ、本文をくわしく引用していくことができなかった。

(4) 学習者の批評によれば、この方法は、かなり支持率が高かった。「こんなにして読んだのは初めてだ。」「くわしくわかってよい。」「ノートよりまとまって頭へはいった。」「学習者はいつも、新しい方法が好きらしい。教材への関心もなく、学習意欲をもたない生徒ほど、なにかおもしろいことはないかという期待をひそめている。」

おわりに

○ こういう読みを重ねて、同じ理解をしたあとでてくる感想は、ほとんど同じ方向で、深みはあっても広がりはない。この方法は、感動を画一化してしまふのだろうか。あるいは、この作品の性

格によるものであろうか。

○ この作品は、特に母を失っている学習者（意外に多かった）に深い共感を与えたようで、生き生きとした感想がよせられた。その中の一人は、「二組の男生徒で、「かあちゃんと呼べどむなく草のつゆただ寂しさにぬれて星見る」ほか数首の歌を含み、原稿用紙十六枚にわたって、「母への思慕」をつづってきた。「人生の寂しさ」が、「人生に深入りする強さ」であることを、事実において、深く理解しているようで、心打たれた。

○ 私はやはり、「深い感動は、解釈のきわみに生じるもの」と考える。考慮しなければならぬ問題を残しているが、「深々と読みたい」と願うひとつの方法として、私は自分の実践の中に、この方法をとり入れていきたいと思う。

読めば読むほど、新しい発見のある「文学の世界」の喜びを、ともどもに分かちあいたいと願う心は熱い。

（愛知県祖父江高等学校教諭）

三十七年十月三十日記